

## こどもとむしの秘密基地 佐用町昆虫館小史

三木 進<sup>1)</sup>

### はじめに

2009年4月に開館した佐用町昆虫館。多くのナチュラルリストや市民、研究者、行政に支えられ、災害を乗り越え、年間4000～5000人の家族連れが訪れるようになった。4年目の春を迎えるにあたり、前身の兵庫県立千種川グリーンライン昆虫館の設立当初を含め、小史として、その歩みを記録しておく。なお、本稿は、2011年に加入した全国昆虫施設連絡協議会（以下、全昆連）の機関紙「昆虫園研究」に寄稿した小文をベースに加筆した。

現在、最初の館長を務めた山崎高校の生物の先生、そして内海前館長らから、順次お話を聞かせていただいている。2、3年を目途に「佐用町昆虫館史」をまとめたいと考えており、本稿は、その最初の一步である。

### 兵庫県昆虫館誕生

1971年5月、兵庫県佐用郡南光町船越に「兵庫県立千種川グリーンライン昆虫館」（通称兵庫県昆虫館）として発足。敷地面積942平方メートル、延べ床面積165平方メートルというミニサイズ。谷あいの上三河小学校船越分校の跡地であった。4年後の中国自動車道、山崎、佐用両インターの開通をにらんでの開設。千種川という西日本有数の清流に沿って、既存の船越山モンキーパークから、県立西はりま天文公園（1990年開設）へとつなぐ、学習型レクリエーション・ゾーンの一環だった。

当時、関東では昆虫学者の矢島稔氏が、豊島園昆虫生態館（1957年）を、続いて多摩動物公園に昆虫園（61年）を開設していた。豊島園から遅れること14年、西日本初の館として、にぎにぎしく開館した。県の設計者も昆虫館なるものに頭を悩ませたのか、外観、内部とも豊島園昆虫生態館に、そっくりだった。

そのいきさつを矢島氏から直接、伺う機会を得た。2011年9月29、30の両日、宮崎県宮崎市で開かれた平成23年度・全昆連の席上であった。何と、1957年の豊島園昆虫生態館の開館直後に、兵庫県の担当者らが同園に矢島氏を訪ね、設計図を持ち帰ったという。

兵庫県昆虫館の展示の目玉は、世界各地の蝶、甲虫など4000種3万頭にも及ぶ「平山コレクション」だった。

「原色千種昆蟲図譜」など、多くの図鑑を手がけた昆虫学者、平山修次郎が収集した標本である。平山は、東京・井之頭に個人の昆虫博物館を持ち、渋谷には分室まであった。矢島氏は、当時の子供にとって「平山さんの昆虫館に行くのが、何よりの楽しみだった」とも話された。

その偉大なる平山コレクションが入る兵庫県昆虫館、昆虫学の新たな西の拠点になると期待されたからこそ、設計図を渡されたのだろうと、推察した。

兵庫県昆虫館が実際にオープンしたのは14年後なので「何で、あんなに遅れたのか」とも聞かれた。この辺りは、県当局等、さまざまな苦勞があったようで将来の本編に譲ることにしたい。何はともあれ、西の砦は開館した。

### 内海氏の時代

開館3年目から、植物分類が専門の地元の中学校教諭、内海功一氏が担当。自宅近くでもあったことから、敷地内でさまざまな植物を育てた。開館当初の写真には、まったく緑がなく、周囲には運動場のような空間があるだけ。内海氏がいかに丹精を尽くされたかが伺える。

やがて「年間を通して生きた昆虫が見られる施設」として評判を呼んだ。モータリゼーションの全盛期。すぐ上流部にあるモンキーパークの人気もあって、観光バスが連なり、ピーク時には年間1万8000人もの入館者があった。虫のえさ替えなど、365日ほぼ休みなしの運営。家族総出でかかり、冠婚葬祭にも思うように休めなかったという。大型水槽でエサを待つ何十種類もの虫たち。「あの虫のエサはあの谷に、こっちは向こうの山に」と、一日の業務が終わると行脚が始まった。しかし、共に館を支えてきた奥様が他界され、氏も高齢となった。木造の建物も老朽化した。開館以来、すでに38年の歳月が流れていた。

入館者数は5000人台までに減った。県は、行財政改革の一環として、佐用町に「昆虫館の管理運営を委託したい、町が継承するなら施設を無償譲渡する」と打

<sup>1)</sup> Susumu MIKI 兵庫県明石市

診した。しかし、町も合併後とあって財政状況も厳しく、後継者も見つからなかった。昆虫研究家の間で、存続を望む声はあったものの2008年3月、廃館となった。

### 設立

その一方で2007年11月末、佐用町にセカンドハウスを持つ神戸大学農学研究科の竹田真木生教授は、県の広報で廃館を知った。何度か館を訪れ、内海氏の取り組みを目の当たりにしていただけないで、昆虫館という存在の「小さくとも、そこにあることの大切さ」を訴えた。兵庫県立人と自然の博物館(以下、人博)の八木剛主任研究員らが協力し、神戸大学のOBや関西の研究者、アマチュアの虫屋、虫好きを巻き込んでの取り組みが始まった。佐用町長との面談を経て、NPOとの連携による再開の可能性が出てきた。

しかし、すでに町議会でも「廃館」が決議されていた。地元説明会などを重ねる一方で、2008年5月、内藤親彦神戸大学名誉教授を理事長にNPO法人「こどもとむしの会」が誕生した。60人でのスタートだった。町条例が制定され、NPOが昆虫館の指定管理者として管理、運営にあたることとなった。委託料は年間200万円弱。

かの平山コレクションは、燻蒸処理を受けた後、人博の収蔵庫に収められ、その後、ひょうご環境体験館に貸し出された。

昆虫館内には、40年近くわたる収集品をはじめ年代物の実験器具、気象観測の記録、カビの生えたものまで、“備品”が玉石混淆の状態で大量に残っていた。土日を中心に、会員たちがそれらを丁寧に仕分けし、処分していった。すさまじいまでの作業であった(写真1)。

燃料費がかさむ温室は撤去し、お弁当が広げられるスペースに生まれ変わった。展示の準備が出来るようになったのは2009年3月に入ってから。会員たちが国内産を中心に標本を寄せた。その数100箱余り。研究発表のパネル、生態写真に、副理事長で赤松の郷昆虫文化館館長の相坂耕作氏による、江戸時代の貴重な「虫籠」

など、民俗資料の展示もあった。

そして、館を取り巻く敷地は、「奇跡の植物園」でもあった。内海前館長が周辺の山から株分けした、さまざまな草本が茂っていた。特にシダ植物に貴重種が多かった。内海氏に献名されたハリマイノデを筆頭に、1956年に船越山で発見されたルリデライヌワラビ等々。今日では、鹿の食害によって、痕跡すら残っていない希少種である。期せずしてジーンバンクともなった。

### 再開

2009年4月再オープン。NPOの会員は、それぞれ自分の仕事を持っている。虫の活動に合わせて、4月から10月末までの土日祝日のみの開館とし、毎回、会員が交代で1日館長とサブ館長になり、2人が開館時の責任を負った。入館は無料。

朝10時の開館を待ちかねたように、家族連れが訪れた。GWには1日200人を超す来館者があった。こども達は標本に目を輝かせ、カウンターに並んだ季節ごとの生きた虫に触れ、スケッチにも挑戦し、持ち出し自由の網を手し、飛び出していった(写真2)。

来館者は日ごとに増え、兵庫県内はもとより、大阪、京都、名古屋、岡山と各地からの来館があり、7月末で2000人を超えた。来館者の記帳は任意なので、実際には、1,2割多い。昆虫館とNPOのホームページやブログにもアクセスが増えた。正会員は80人になり、メール会員は300人を超えた。

夏休みには、神戸・元町の兵庫県学校厚生会館で2週間あたり「元町昆虫館」を開催した。団体、施設、学校から昆虫や自然についての指導依頼も飛び込んだ。

財政的には、指定管理料には電気代や修繕費も含まれているため、200万円弱では館を維持するのが難しい。そこでNPOの年会費を1万円とし、博物館と市民をつなぐ活動に贈られる花王の助成金(年50万円)にも応募、「元町昆虫館」の委託費、依頼を受けた昆虫教室の礼金なども、すべて会に納めることにした。会の財



写真1 処分品は温室に集められた。



写真2 お絵かき教室。標本を見て、ていねいに描く。

政規模は、ようやく年間 400 万円台に。1 日館長とサブ館長には、活動に必要な交通費、車の場合は走行距離 × 10 円のガソリン代と高速料金の実費を支給し、さらに経費として、1 日 2500 円を出すことが可能になった。

NPO による昆虫館の運営は成功し、将来の発展の可能性も見えてきた。新聞、テレビでも取り上げられた。こうした成果を背景に、佐用町昆虫館と人博との提携が決まった。

### 災害

8 月 9 日、内藤理事長と人博の中瀬勲・副館長、庵道典章・佐用町長も来館し、協定が結ばれた。まさにその日の午後、雨脚が強まった。午後 2 時過ぎには大雨・洪水警報も出たが、何とか無事、閉館することが出来た。

千種川の支流、寺谷川の川筋に建つ昆虫館は、土砂で埋まった。山中に放置されていた倒木と、斜面崩壊に伴うスギの大木が流下した。2 本の巨木が館の下流部分に横たわり、そこに大小の流木が引っ掛かり、ダムと化した。背後に土砂が堆積し、やがて昆虫館の敷地内を埋め尽くしていった (写真 3)。

標本展示室の外壁は 1.3m まで土砂に埋まった。窓の上、数 cm のところでギリギリ土砂が止まり、ガラスは割れなかった。館内は 10cm ほど泥水が溜まったが、標本箱は無事だった。



写真 3 “流木のダム”と昆虫館 (林の左手に屋根が見える)。

NPO で災害対策本部を設け、手分けして現地確認に走った。昆虫館周辺の民家も被災し、畳の上には土砂が堆積していた。幸い、どの家でも 2 階に避難していて無事だった。

### 復旧、復興

まず標本箱を運び出した後は、地域の暮らしを優先し、周辺民家の泥出しに励んだ。館の周囲には 200m3 もの土砂や岩が堆積したままだった。

8 月 21 日、「合同で復旧作業を！」という申し出があり、千種川圏域清流づくり委員会、大阪のシニア自然大学などにより、合同救援隊が組まれた。同委員会とのつながりで、20、30 歳代の滋賀県職員 14 人も駆けつけてくれた。昆虫館だけでなく、近くの民家の土砂を出した。阪神淡路大震災を経験した会員が先頭に立った (写真 4)。

姫路造園建設業協会のメンバーが「こどもの時にお世話になった。昆虫館は植木が多いだけに、土砂出しは私たちの仕事」と、9 月 26、27 の両日、大小のコンボ数機、何台ものダンプと土砂を運ぶ特殊車両まで持ち込んだ。当会のメンバーも延べ 20 人が、細かな部分の作業に当たり、ついに膨大な土砂が運び出された (写真 5、6)。

佐用町は災害復旧費として 500 万円の予算を組んだ。



写真 5 高野山真言宗播磨青年教師会の活動。



写真 4 合同作業の記念写真。



写真 6 姫路造園建設業協会の重機が活躍。

壊れた擁壁を作り直し、フェンスを設け、内部にペンキを塗る。さらに別会計で町水道を導入した。

### 再々開

明けて2010年4月3日、再々オープン。新聞、テレビと報道陣も駆け付け、晴れの日を祝ってくれた。県昆虫館から町昆虫館になる段階で模様替えもし、幾分明るくなったが、今回は窓の新設などで雰囲気が一変、開放的で楽しいスペースに生まれ変わった。2度の脱皮を経て、ようやく理念通りの運営が可能になった。そして、災害復旧に励んだ、汗と涙の土木作業の中で、昆虫館で初めて出会った会員たちが信頼関係を強めていった。災害が新たな原点となったのだ(写真7)。

館内展示に加え、「こども昆虫道場」と名付けて、5月から10月まで半年を通して、一流講師陣による本格的な学習から昆虫採集、観察、標本作りまでを指導するプログラムもスタート。体験型の自然施設として小学生の人気を集めた。平日の団体利用も増え、幼稚園や小学生が館内の学習の後、周辺でチョウを採り、草原でバッタやトンボを追った(写真8)。

兵庫県はもとより大阪府などの都市部からも来館、リピーターが多いのが特徴となった。家族連れがお弁当持ちで一日中、それぞれのやり方で館を、自然を楽しんだ。お盆前後には、1日で300人を超えた。8月下旬にNHKが昆虫館に通う被災少年を追い続けたドキュメント番組、「にっぽん紀行「ファールたちの夏～水害で傷ついた町で～」」を全国放送した。佐用町昆虫館は一躍、全国区に。少年を訪ねてくる人もあった。

2010年は70日開館し、4388人が来館、平日利用も入れると4891人が訪れた。

2011年には、学生会員による小学生や高校生を対象にしたプログラムも始動。与那国島のアヤマヒビル館と連携し、与那国小学校と、佐用町昆虫館の地元、三河小学校の3、4年生の交流も行われ、生息する昆虫の違い

から生物多様性の理解へと導いた。続いて、北海道の丸瀬布昆虫生態館との連携も計画している。

昆虫道場も継続された。道場以外でも、定期的に館を訪れ、自分で標本を作り、夏休みの課題として提出した例も。楽しむ館から、目標を設け、継続的に採集に励む子供たちが出てきた。手ぶらで来ても思っきり虫が採れることが、何よりの魅力となった。網舎を利用し、2009年から続けてきた地元、船越産のカブトムシを自然状態で増殖する作戦は軌道に乗り、大きな成虫が次々と羽化した。こどもと昆虫をテーマにした写真コンクールも、好評だった。

2011年には、69日間に3519人が入館した。加えて平日の利用も408人と増えた。

3月11日の東日本大震災以降、NPO内にプロジェクトチームを作り、こどもを対象にしたイベントに向け義援金を募った。佐用町昆虫館は復旧、復興の過程で、多くの方に助けていただいた。せめてものお礼だ。6月から4回にわたって、会員ら4人が陸前高田市立博物館の被災標本のレスキューに当たり、岩手県立博物館で延べ3週間あまり作業し、陸前高田市立博物館の復旧、復興に携わる人々と交流。会員らが持ち寄った多くの採集、標本作成道具や図鑑類を届けた。宮城県の児童館で移動昆虫館を開いた会員もいた。

### 課題

NPOの活動はメンバーがすべてだ。職業はさまざまな90人が、個性的なスキルを持っている。昆虫以外にも、淡水魚の飼育に細密画、紙芝居、切り絵、組み紐、料理、樹木管理、植栽、防災、土木、大工仕事。それぞれが、1日館長という体験の場を通して、理念構築してることが、欠かせない。小さいが、マンパワー溢れる佐用町昆虫館に何ができるのか。挑戦は続く。



写真7 多くの努力で再々オープンが実現した。



写真8 近くの草原で、こどもたちは虫を追う。